

日中経済交流研究会 2月例会報告

中国経済の崩壊が近づいているのか！

～虚構と実態を見極め、これからの対応を考える～

基調講演：「中国経済の現状をどう見るか？」

慶応大学経済学部教授 植田浩史先生

日時：2016年2月10日（水）／場所：大江ビル／参加者：49名



中国経済の崩壊が近づいているのか。2月例会では、この中国経済の内実を知るべく、慶応大学の植田先生に講演いただきました。その内容をレポートします。

■中国のGDPの推移

成長率は減速だが、GDPが拡大すれば成長率は鈍化する。2001年から2014年にかけて名目GDPは約5倍！昨年7～9月四半期の成長率は7%弱。今後5年先を見たときには、3～4%の成長は確保すると思われる。

■株価の推移

株価は短期的には下落しているが、5年程度で見ると、落ち込んでいるわけではない。そもそも上場会社の一部の大手製造業だけの株価をもって全体を語ることは適切でなく、異常に上下することが問題。

■元の変化は元高？元安？ドル連動か？

ドル高に伴って元高に推移。国際通貨としての元の安定化が問題である。

■「世界の工場＝中国」の終焉？

労働集約型産業は賃金上昇の影響を受けやすいが、2005年以降、世界貿易に占める割合は低下していない。理由は、労働集約型製品産業の仕組みが中国ででき上がっており代替地域がないからである。

■「中所得国のわな」＝中国悲観論

経済が中所得国のレベルで停滞し高所得国入りができない状況。新興国が低賃金労働を原動力に経済成長して中所得国の仲間入りを果たしたのち、人件費上昇や先進国のイノベーションによって競争力を失い、経済成長が停滞する現象。たとえば、メキシコ、アルゼンチン、ブラジル。

■賃金水準の推移

最低賃金は上海では月額2000元超え（日本円で約4万円）雇用する際は、付加給付が伴い、最低賃金の倍にのぼる。

■中国の技術力をどうみるか

ハイテク分野で国際特許を積極的に取得している。かたやドローンや太陽光パネルでは「ほどほど」の技術をもって、量で他を圧倒。

■中国現地工場でのコストダウン

日系メーカーの現地生産は、コストダウンのために日系の排除が進んでいる。ローカルから調達しなければ、成功しない。

■中国経済への視座

巨大で多面的な要素を持つ中国を、マクロ的な視点で見ると見えなくなる。いろいろな立場からの意見を合わせて考察する必要がある。日本には中国経済の崩壊、減速、終焉、中所得国のわなをいう「嫌中論者」が存在する。それに引っ張られないようにしなければならない。科学的かつ多面的な中国経済への視座を持つことが大切である。

■中国の現状と今後

「過剰」と「バブル」先進国よりはるかに劣る金融システムであるが、内需は強く、製造業からサービス業への産業構造の転換を図っている過程である。歪も生じているが、「強靱さ」とネットワークが構築された製造業、自動車に代表される潜在的な需要はまだ存在する。何よりも最大の強さは「起業家精神」まだまだ可能性のある経済（国）である。

まとめ（株）電研社 野村 明宏